



Title	国外在留邦人が語る東日本大震災：対面における意見交渉の過程とアイデンティティ表出を分析する
Author(s)	秦, かおり
Citation	言語文化研究. 2014, 40, p. 123-142
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27606
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国外在留邦人が語る東日本大震災：対面における 意見交渉の過程とアイデンティティ表出を分析する¹⁾

秦 か お り

Narratives of the Great East Japan Earthquake told by Japanese women living abroad : An analysis of the opinion negotiation process and representation of identities in face-to-face interaction

HATA Kaori

Summary: This paper is a case study of interview narrative of Japanese women living in the UK. The purposes are 1) to clarify how micro-communication resources (linguistic expressions, laughter, gestures, dysfluency, eye gaze, etc.), as well as small stories including hypothetical scenarios, reflect the overall message conveyed in the narrated world and how that relates to representation of identity, 2) to demonstrate how the participants in conversation (including the interviewer) can take up particular stances on their positions by using certain forms of representation through which they can pursue the process of reconstruction of their identities. These points will be illustrated through analysis of interview narratives about the Great East Japan Earthquake.

キーワード：東日本大震災，ナラティブ，アイデンティティ

1. はじめに

2011年3月11日に起きた東日本大震災とその後の原発事故は、未曾有の被害をもたらした。それは単に物理的な被害だけではなく、主として私たち日本人の心に様々な影響をもたらしている。地震発生当初から今日に至るまで、「実際に地震の揺れや放射能による被害を経験した者」と「それらを見聞した者」、「原発稼働に賛成する者」と「それに反対する者」、「放射能汚染を気にする者」と「それを気にしない者」といった、これまでになかった（より正確には表面化されなかった）「違い」が表面化し、触れにくい話題や「微妙な」話が日常生活の中で散見されるようになった。例えばそれらは、小学校の給食を巡るお便りや母親同士の会話、著者のイ

1) 本稿は2013年9月に開催された第13回国際語用論学会（於：インド）においてパネル発表されたものを土台に大幅に改定したものである。

ンタビュイーらとの会話にも現れた。本稿は、そうした日本の震災当時からそれ以降の状況を国外で見聞した在留邦人に「震災体験談」を聞くインタビューを行い、分析したものである。

本稿の目的は、第一に、1つのインタビュー・ナラティブの中に立ち現れるスモール・ストーリーがナラティブを構築していく上でどのような役割を果たすのかを実際の例から明らかにすることである。さらにそれを土台に、ナラティブ構築の過程で使用されるスモール・ストーリーの中に現れた言語的・非言語的要素を分析し、それらの要素がナラティブ構築にとっていかに必要不可欠であるかを論ずる。このことによって、言語的要素の分析に偏りがちなナラティブ研究に一石を投じる。第二の目的は、インタビューで語られた内容の分析として、国外で東日本大震災を「経験」した日本人であるインタビュイーたちの地理的距離と心的距離の関係性の一端を明らかにすることである。東日本大震災の後、それを分析する研究はありとあらゆる分野で雨後の筍の如く出てきたが、「被災者」とされない人々が震災をどう受け止めたのかは、まだあまり研究されていない。本稿では、少なくとも「震災体験者」としての彼女たちの存在を明らかにし、その特徴を明らかにしていく。

2. 理論的背景

2.1 スモール・ストーリーについて

スモール・ストーリー (small story) は所謂「大きな物語 (big story)」とは異なる、ナラティブの基準 (canon) から逸脱したものでありながら、ナラティブとアイデンティティ研究において非常に重要な要素であるとされる²⁾。Labov and Waletzky (1967) では、ナラティブとは過去の経験を再現するための1つの言語的技法であるとされ、それは「方向付け」から始まり「複雑な行為」へと進み、「評価」を行い「結末部」でまとめあげて「終結部」で聞き手を現在に戻す、といった一連の流れがあるものとされた。しかし、それらの構成要素が揃わない「語り」もナラティブとして分析する潮流が現れた。Bamberg and Georgakopoulou (2008) らは、時系列に沿って語り手が一貫して過去の出来事を語る「大きな物語」の対として、「小さな物語 (スモール・ストーリー)」分析の重要性を主張し、スモール・ストーリーとは、現在進行中の出来事を語ること、未来や仮定の出来事を語ること、ほのめかし、語りの据え置き、語りの拒否など、ナラティブ行動の全域を捉える包括的な用語であるとした。そのような多様な形式をとるスモール・ストーリーの機能の1つとして、議論のポイントを裏付けるというものがあり、本研究では主として、「震災体験談」という1つの大きなナラティブの流れの中で、議論のポイントを裏付けたり補完したりするものを取り上げ、分析していく。例えば、「仮説の話」として出てくる、「もし前日だったら」「翌日だったら」というストーリーは、自分が被災者にな

2) このことを、Bamberg らは、新たなナラティブ・ターンと呼ぶ (Bamberg 2004, Georgakopoulou 2007, Bamberg and Georgakopoulou 2008 他)。

り得た、あるいは実際には被災者にならなかった、という震災体験談を補完する仮説のストーリー・ストーリーである。本稿では、東日本大震災の震災体験を「実際にその場その時に揺れを感じ甚大な被害を被った」人々ではない、英国在住の人々に話を聞いているため、例えば出産体験を語る時のように、過去の固まった（「ネタ化」した）出来事として語られるものと比べれば、「ネタ化」するほど、日頃は日本人に「震災体験談」を語る機会は少ないと考え、その場その時の関与の場（sites of engagement）³⁾の影響を強く受けると仮定した。これらの点を以下の分析例では取り上げていく。

2.2 ポジショニング理論について

ポジショニング理論（positioning theory）は、ナラティブ・ターン以降にナラティブを相互行為としてのトーク（talk as interaction）として捉え、ナラティブとアイデンティティの社会言語学的研究の1つとして、そこに立ち現れる3つのレベルのポジション（立ち位置）を分析することでアイデンティティ研究を行うことを主眼においた理論として考えられた（Bamberg 1997, De Fina 2003, De Fina, Schiffrin and Bamberg 2006, Schiffrin 1990 他）。レベル1においては、物語世界（tale world）において語り手が自己をどのように語るのかを示す。例えば、「被災者」「間接的な（準）被災者」「非被災者」などの震災体験談の中に出演する自己が、その語りの中でどのように他者とかわり合い、己を成立させているのかを、本稿の物語世界における語り手は語ることになる。そこにはさらに「まぬけな自分」や「悲劇的な自分」、また仮説の語りの中では「大きく被害を被った被災者」がいるかも知れない。物語世界で立ち現れるポジショニングは「実際に起こったこと」であるかどうかとは関係なしに、あくまでも語りの中の登場人物としての「私」である。これはレベル2においては、語りの世界、本稿においてはインタビューの場において、語りを通してどのようにみられたいか、あるいはみえているかという「今-ここ（here and now）」の関係性における立ち位置の問題となる。例えば、インタビューという手法を選んでいる限り、その相互行為にはインタビュアーとインタビュイーという属性を持った2名が少なくとも登場し、語りを通して様々な関係性を築いている。さらにレベル3は、「transportable」⁴⁾な、つまりその場その時の文脈を離れたとしても成立する「私とは誰か？」という問いに答えを与える社会的文化的アイデンティティについて分析するものである。

これら3つのレベルのポジショニングは分析のためのツールであり、時として上手く3つのレベルに分割できないこともある。語りの中に文脈から切り離されたアイデンティティが表出している場合などは特にそうである。しかし、ポジショニング理論の根本的な目的は、ナラ

3) Scollon and Scollon (2004) 参照。

4) Georgakopoulou (2011: 404) では portable となっているが、その引用元の Zimmerman (1998) では、transportable である。Zimmerman はアイデンティティについて discourse, situational, transportable という3種類を示す。transportable identities とは、身体的あるいは文化的に備わった、その範疇に属する構成員が間主観的に備えている記事のようなものとされる。

タイプの中で再／構築されていくアイデンティティを捉えることであり、必ずしも3つのレベルに綺麗に分割されることが重要ではない。そのため、本稿では複雑な人間関係の中に立ち現れるアイデンティティを分析するための方略として援用することとする。

2.3 アクティヴ・インタビューについて

インタビューは多くの分野で昔から用いられている調査手法であるが、特に社会科学の分野においては、かつては、回答者から信頼性のある「情報」を最大限に引き出すものであり (Gorden 1987)、バイアスや間違いや誤解は、インタビュアーの質問いかんで拭えるものという認識を示してきた。多くの研究者がインタビューは社会的な相互行為であると見なし、ながら、インタビュアーの役割を「情報を引き出す (受け止める) 者」とし、インタビュアーとインタビュイーの相互行為を産出の場として考えてこなかったとホルスタイン (2004) は指摘する。しかし、Briggs (1986) はインタビューという場そのものが、他の発話行為と同じように、その表現形式と内容を根本的に構築するものであると主張し、その捉え方をもってインタビューを用いる研究分野でのインタビュアーの役割が変わったと言えるだろう。つまり、インタビュアーも回答者と同じように、不可避免的にインタビューの意味内容構築参与者として「アクティヴ」であり、「(その) 両者が積極的にかかわりコミュニケーションを行うことを通して組み立てられていくもの」(ホルスタイン 2004: 21) となる。そのことは、伝統的で「標準的」なインタビューから外れることを意味するが、「回答者との相互行為を通して、インタビュアーはいま問題になっているテーマに関連する回答者の経験について、彼らがそれを表現出来るような言説的な土台を確立する」(Ibid: 121) 存在として相互行為に加担しており、単にあいづちを打ち「適切な」質問をするだけの存在では、もはやなくなつたと考えられるようになった。これがアクティヴ・インタビューの基本的考えであり、山田 (2011) はこれを「対話的構造主義的アプローチ」と呼び、「インタビューという社会現象は調査者と対象者が相互行為に積極的に関与することを通して進行的に構築される」と述べている。この流れはナラティブ研究においても取り上げられ、“Researcher and participant as co-constructors of narratives” (Bamberg 2013) と述べるように、インタビュアーの言説を分析することなしに相互構築を分析することはできないと考えられるようになった。本研究ではこの考えを踏襲し、インタビュアーは積極的にインタビュイーとコミュニケーションを行い、共に意味を構築していくこととし、インタビュアーの言説も相互行為の一翼として分析対象とする。

2.4 マルチモダリティについて

マルチモダリティ (multimodality) は 1960 年代以降、多く分析されてきており、相互行為論の中で非言語が持つ意味や (人によっては「文法」と捉えられる) 法則性を見出す研究も多い (Goodwin 1981, Heath 1986 他)。また、McNeil (1992, 2005) ではジェスチャーが

発語とどう関わり、どのような意味を生成するかに着目し、詳細なジェスチャー分析によって私たちが日常行っている所作の1つ1つにコミュニケーションメッセージと深い関係があることを示した。これらの研究によって、発語されたもののみをメッセージの主体として研究していた時代から、人々はコミュニケーションをとる際には言語と非言語の両方を駆使してメッセージを伝え、相互に意味を構築しているのだと考える潮流へと変化していったのである。

そうした流れの中で、近年ナラティブ研究においても「物語的テキストとしてのナラティブ」から「相互行為的实践としてのナラティブ」に関心を移す潮流に合わせ、「今-ここ」において行われている行為をことばの語用論的側面だけで分析するのではなく、ビデオ録画を行い、その他の要素も分析しようという動きがでてきた(細馬 2008, 片岡 2011 他)。さらに、片岡(2013)は、民族詩学的観点も取り入れ、非言語的要素もその関連性を詳細に分析することで、一見ナラティブにみえない TV コマーシャルの一場面をナラティブとして分析してみせた。本研究においても、対面場面でのナラティブとは非言語的要素(例えばジェスチャーや視線などの身体言語、その時その場で話されたことによる記号論的意味)をも研究対象に含めることで初めて、ナラティブが相互行為的に構築されるものと捉え、言語的要素と等価に非言語的要素を分析する。

3. データ

3.1 英国在住日本人女性へのインタビュー調査の背景

本研究⁵⁾では2010年、英国における出産育児体験を語ってもらうという題目で日本人女性を募り、2010年には29名、2011年には22名、2012年には11名へのインタビューを行ってきた(そのうち2011年と2012年は、2010年の継続調査である)。インタビュー形式は、調査者であるインタビュアーが用意した幾つかの質問項目をきっかけに、インタビュイーに自由に語ってもらうというものであり、長さはそれぞれ約30分から2時間程度までである。インタビューは対面形式で、1対1から1対2、それ以上のグループ・インタビューと様々であるが、いずれの場合も、インタビュアーは前述のアクティヴ・インタビューの理念に従い、インタビュイーへの促し、確認などを積極的に行い、相互行為者の1人としてインタビューの場に存在した。インタビューは原則としてインタビュイーがくつろげる空間で行われ、全て録画録音された。

本稿で用いられるデータは、当初の目的である出産育児体験からトピックとしてはやや外れる。しかし、2011年の東日本大震災後の夏のインタビュー時で、震災については聞いていないにもかかわらず、インタビュー前後のおしゃべりの中では震災の話が出ており、「あの時どこにいた」「何をしていた」など、一通りの話が繰り広げられていた。その中で、日本にい

5) 本研究は、科学研究費(挑戦的萌芽研究 22653060、研究代表者 秦かおり)の助成を受けて行われたものである。

なかったからこそ感じる震災への思い、英国にいるからこそその報道からの影響などがあるかも知れないと感じ、2012年にそのトピックをインタビューに加えていった。

3.2 本稿で用いられるデータの詳細

本稿で用いられるデータは、2012年夏、深夜⁶⁾に収録された。インタビュアーは本稿執筆者の調査者であり、インタビューは2名で両者は親しい友人同士の間柄である。表1にあるように、インタビュー2名の属性は非常に類似しており、主な違いは在英歴の差が1年程度と、夫との会話に使用する言語の違いである⁷⁾。

表1 インタビューーの基礎情報(2012年現在)

氏名 ⁸⁾	在英歴	職業	夫の国籍	夫との会話に使用する言語	夫との出会い	子
ゆき	7年	専業主婦	英国	日本語	日本	2
やよい	8年	専業主婦	英国	英語	日本	2

このインタビュー2名は毎夏継続的にインタビューを受けており⁹⁾、2012年のインタビュー時は3回目のインタビューであった。しかしそれだけではなく、インタビュアーとこの2人はそれぞれの子どもの年齢が近いことから、インタビュー時以外にも、一緒に公園やバーベキューに出かけたり、互助会的日本語補習教室に参加させてもらったりと、当時既に友人としての3年間の交流蓄積があった。そのこともあり、インタビューではあっても、初年度に比べて場もくだけており、インタビュー同士のインターアクションだけでなく、インタビューとインタビュアーのインターアクションでも頻繁にオーバーラップしながらターンを交換し、敬意表現が抜け落ちるなど、言語形式だけを分析すると、親しい友人同士の会話に近い。しかしそれでも、幾つか用意していたインタビュー項目をきっかけに語り出し、3人で語って最後に評価付けを行って収束し、次の項目への口火を切るのは常にインタビュアーであり、全体を形成するのはインタビュー形式の中でのナラティブといえる。

4. 分析と考察

本稿で扱うインタビュー・データは収録時間2時間4分であるが、実際に震災について語っている時間は1時間程度である。表2のように、インタビューを始める態勢を整え録画を始

6) 子どもたちが寝静まり、手が空いてからのインタビューとなったため。

7) 夫との会話に使用する言語の違いは、その家庭での文化的要素の違いにも繋がる。ゆきは夫との会話を日本語で行い、夫は日本語が堪能である。そしてゆきの家庭では、ゆきが専業主婦ではなかった頃から家庭での家事全般は基本的にゆきの担当であった。やよいは夫とは英語で会話をし、夫はあまり日本語を解さない。また日本での滞在歴の中で、女性だけが家事育児を担うことに違和感を感じていたやよいの夫は、「出来る方が出来ることをする」という家事育児の方針を持っており、ゆきとやよいは同じ専業主婦で同じく家事育児全般を担っていても、その根本のコンセプトが異なると言えるだろう(2011年調査結果より)。

8) インタビューーの氏名は全て仮名である。映像から取り出した画像は個人情報保護のため、ぼかし加工を施している。

9) この2名の過去のインタビュー調査結果研究については、秦(2013)参照。

めてから目的であるインタビュー項目に入るまで、実に9つものトピックが本題に入る前の当たり障りのないやりとり¹⁰⁾の中に入り込み、それに約1時間を費やしている。これは標準的なインタビュー形式としては長過ぎる導入であり、最後に「止まりませんでした、ペラペラと(ゆき¹¹⁾)」「子どももないし(ゆき)」「そ！(やよい)」「そー、邪魔されないから(インタビュアー)」と3人で納得し合うように、この3人にとって子どもがいない空間でおしゃべりを楽

表2 インタビュー中の話の流れ

1	子どものスイミングクラブについて(ゆき、やよい)	本題前の当たり障りのないやりとり
2	互助会的日本語教室のスケジュールについて(3人)	
3	ロンドンオリンピック渋滞について(3人+インタビュアーの夫)	
4	子どもの遊び場の混雑具合について(3人)	
5	夏休みの子どもの相手は疲れる件について(3人)	
6	お土産を渡す	導入
7	子どもの端末電子機器使用制限について(ゆき、インタビュアー)	本題前の当たり障りのないやりとり
8	インタビュー誓約書に書名	導入
9	インタビュアーの子どもについての話(インタビュアー)	本題前の当たり障りのないやりとり
10	無宗教墓地でのブラックベリー摘みについて(インタビュアー)	
11	日本と英国の埋葬形式の違いについて(インタビュアー)	
12	*2011年のインタビューのフィードバック(インタビュアー)	前年度フィードバック
13	*英国での家庭内での家事育児分担について(インタビュアー)	
14	*東日本大震災について(インタビューの意図の説明)	震災体験談
15	ゆきの震災体験(夫の東京出張体験談)→例1	
16	やよいの震災体験(被災したかも知れない仮定の話)→例2	
17	放射能汚染の話	
18	放射能汚染を気にする日本在住の友人の話(ゆき)	
19	インタビュアーの体験談(インタビュアー)	
20	被災地の話(やよい)	
21	東京オリンピックの可能性(やよい)	
22	義援金未分配の話(やよい)	
23	自分の義援金行方不明の話(インタビュアー)	
24	チャリティー活動(ゆき、やよい)	
25	原発稼働の話(ゆき)	
26	福井の原発(やよい)	
27	原発の輸出産業(インタビュアー)	
28	英国の原発推進政策(インタビュアー)	
29	子どもの「震災ごっこ」(ゆき)	
30	*メディアの中の東日本大震災(ゆき)	
31	*母親としてどう感じたか(インタビュアーからの質問)	
32	阪神淡路大震災の時との比較(ゆき)	
33	阪神淡路大震災との比較(やよい)	

*はインタビュアーが事前に用意していたインタビュー項目

()内は主な語り手

10)「本題に入る前の当たり障りのないやり取り」はスモール・トーク(井出 2005 他)とされるが、ここでは深く扱わない。

11)「」内の最後に(人物名)がある場合は、その発言をした人物を表す。

しむというこの場が、インタビューとは異なった意味で特別な場であったことを示している。しかし一方で表2が示すように、「誰が」本題前の当たり障りのないやりとりの主な話し手であったかという点をみると、この1時間でインタビューの場として土台が整えられていったことが分かる。まず、最初はゆきとやよいが話しており（項目1）、インタビュアーは介在していない（その場には存在している）。時間が経つに従って、だんだんインタビュアーが話のイニシヤティブをとるようになっていき、誓約書を交わした（項目8）後は、全ての項目でインタビュアーが主な話し手となっている。通常よりも長いプロセスではあるが、この1時間の間に、徐々にインタビュアーが場を制御し始めている様子的一端が垣間見える。

本稿では上記のうち、東日本大震災についてインタビューが始まった項目14からを詳しく分析することとし、特に、（1）震災体験（項目14から16まで）、（2）放射能汚染（項目17から21まで）、（3）義援金活動（項目22から24まで）に焦点をあてて分析していく。これらを通して、心的距離¹²⁾が離れたり近づいたり、評価付けの交渉をしながら最終的に同じ日本人としてのアイデンティティを表出させるまでを追う。

4.1 震災体験談と仮説の話—説得のシナリオ（項目14から16まで）

インタビューが始まった項目14では、まずインタビュアーが、そもそも出産・育児体験を聞いているこのインタビュー調査で震災体験談を聞く意図を話す。その際、インタビュアーは、自分が震災の日に東京におり、都内の研究室で「被災」（被災ということばはどこからどこまでなのか難しいと述べて定義を濁している）したため、一晩自宅に戻れなかったという話と、前年にインタビューをした時に、「英国にいたからこそ感じたものがあったのではないかと思います、インタビュー項目に加えた」と述べている。ここで、インタビュアーは既に、ポジショニング理論でいうところのレベル1（物語世界）において、自己を「（準）被災者」として位置づけており、そのことによって、インタビューの場における関係性を示すポジショニングのレベル2ではインタビュアーとインタビューイであることの他に、「国内にいた経験者の私」と「海外にいて経験していないあなたたち」として「経験者対非経験者」という差異化を計っていることになる。従って、インタビューが始まる時点で、既に二項対立の関係性の提示を行っているといえる。

これに対し、項目15でゆきが夫の東京出張が震災当日にあたったことを震災体験として語り始める（例1）。

12) ここでいう「心的距離」とは親しさの指標であり目視不可能であるが、例えば会話者間の距離の取り方、ジェスチャー、スピーチスタイルシフト、笑い等によって「変化」の計測は可能であると考え。ただし、その計測は、聞き手の反応やその聞き手の反応を受けた話し手の反応によって裏付けられるものと考え。本稿では、主として笑いとジェスチャーを取り上げているが、スピーチスタイルシフトについては秦（2013）を参照されたい。

例 1) ゆきの震災体験（夫の震災体験を語る）

- 1 ゆき あたし知ったのー(.) 丁度うちの旦那が一東京出張だったんですよ
 2 [[音節にあわせて人差し指で机を叩く]] →図 1
 3 かおり¹³⁾ あっ！言っ [てたよね, そうですよ
 4 [[ゆきの顔を指差す]]
 5 ゆき [ね? ↑言いましたよね, これ。 ね? ↑ =
 6 =で(.) あさ(.) がた, 3時4時5時忘れましてけど
 7 [[指で机を叩く]]
 8 かおり ((あいづち))
 9 ゆき テキストが来てー, なんかー「東京で大きな地震があったけどー =
 10 [[左手で携帯電話を持ち右手でテキストを打つ真似]]
 11 =Don't worry, I'm fine みたいな(.)
 12 [[両手のひらを拡げて下に2回拡げる]]
 13 かおり ん [ーんー
 14 [で(.) もー(..) あたしはー(..)
 15 [[背を反らせて両手のひらを自分に向ける]] →図 2
 16 そのー 東京でおっきい地震で ちよくちよくあるじゃないですか
 17 [[音節にあわせて人差し指で机を叩く]]
 18 かおり そうですよ
 19 やよい ん [ー
 20 ゆき [震度4とか5とか
 21 かおり はい, ありますね
 22 やよい んーんーん [ー
 23 ゆき [「ハイハイ」(..)
 24 [[左手で携帯電話をもち, 自分の背後に投げる真似をする]] →図 3, 4
 25 とか [[(吹き出す)] ぜんっぜん なんかそんなーおっきい地震だと思わず
 26 [[音節にあわせて手のひらで机を叩く]] →図 5
 27 かおり [@@@@
 28 やよい [@@@@
 29 ゆき 「ハイハイハイ」(..)=
 30 [[左手で携帯電話をもち, 自分の背後に投げる真似をする]]
 31 =ってまた寝たわけですよ。 @@

13) かおり=インタビュアー

- 32 でー(.) どれくらいおっしかったのかなーと思って 次の一日起きて＝
 33 かおり んー
 34 ゆき ＝インターネットでみーた(.) らー(..)
 35 [[視線をインタビュアーからやよいの方にぐりと回し]]
 36 かおり @@
 37 ゆき あれれれれれれー みたいな (@@が消える)
 38 [[目を見開き口を手のひらで覆う]]
 39 やよい うん
 40 ゆき 大変な事になってるー(..)
 41 かおり うん

まず、インタビュアーであるかおりの予測を裏切ったのは、ゆきの夫は実際に震災を体験しており、英国在住の彼女らは震災体験について当事者意識をもってネタ化するほど語ったことがないだろうという仮定が崩れ、ゆきは語りの間、時系列に従って物語風に長くターンをとっていることである。ゆきの語り口は声の抑揚や音節とジェスチャーが一致している上(図1)、身体的な動きも激しく(図2, 5)、相手に口を差し挟む余地を与えない。聞き手が打つあいつちについても、その上に重ねるように自身の語りを紡ぐ(3, 9, 14, 20, 23行目)。さらに、大きなジェスチャーを使用して言語を使用せずにメッセージを伝えることにも成功している。例えば、ゆきは夫から送られて来た安否を知らせるメールを、「東京っておっきい地震がちよくちよくある」からという理由で深刻に受け止めず、携帯電話を枕元に放り投げる仕草をする(図3, 4)。ことばでは携帯電話を投げたとも、「ハイハイ」が独り言なのかメールに返信しているのかも不明であるが、ここで彼女が携帯電話を投げるジェスチャーをしたことで、彼女はあのような大きな地震にもかかわらず夫からのメールを無視したのだということが理解できる上、この話が笑い話であることも理解できる。この笑いは、一見不謹慎に思えるが、被災者の語りの中でかなり深刻な話題の時でも出るものであり(井出2013)、ストーリーを「ネタ」として協働して盛り上げる共感(involvement)の一種であると考えられる。「大震災の際に心配しているだろう妻に届いた、夫からの無事を知らせるメールを無視した」という事実だけなら、語り方によっては「ひどい妻」を演出することもできた。しかしゆきは大仰なジェスチャーと、放り投げたということを言語化せずパフォーマンスとして見せることで、聞き手2人にこれが笑いどころであることを示し、また聞き手2人もそれに同意して笑ったのである。



図 1) 音節と指の動きを一致させている

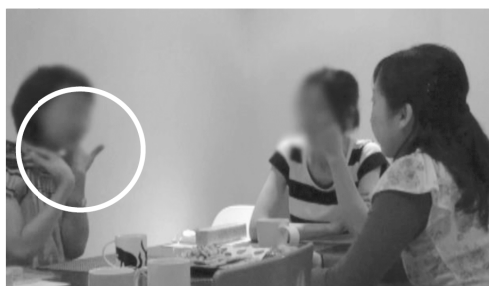


図 2) 大きく「私」を示すジェスチャーを2回繰り返す



図 3) 携帯電話を背後に投げるジェスチャー 始点

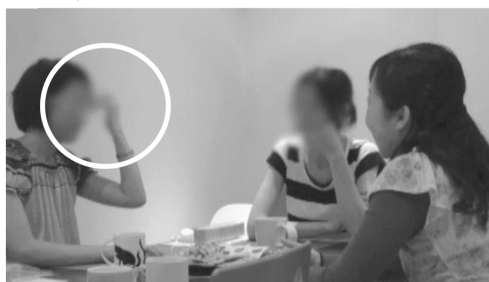


図 4) 携帯電話を背後に投げるジェスチャー 終点



図 5) 音節に合わせて手のひらで机を叩く

* 画面の左手がゆき、中央がやよい、右が調査者。

* ゆきの語りの間、やよいと調査者は殆ど動いていないことが分かる。

ここでゆきが示すのは、ポジショニング理論のレベル 1 においては「被災者の（ちょっとまぬけな）妻」であり、震災と無関係ではない「私」である。ここで、先ほどのインタビュアーが設定したレベル 2 の、「国内にいた経験者としての私」と「海外にいた非経験者としてのあなたたち」という、地理的距離感と震災との心的距離感を一致させた関係性に危険信号が灯る。ゆきにとっては、自分は英国にいたが夫は日本にいて、それなりに「震災体験談」ができる立場であり、「国内外」という地理的な二項対立が人間関係や震災との距離における二項対立と必ずしも一致しない可能性を（おそらく）図らずも示唆し始める。

そこにやよいがターンをとり（項目 16）、震災体験談を語り出す。それが例 2 である。

例 2) やよいの震災体験談

- 42 やよい あたしがその日に帰る予定だった [の
 43 [[自分の鼻を指差す]]
 44 ゆき [あー！そうだー！そうだー！
 45 [[身体を反らせ、パンと手を叩く]]
 46 やよい ()
 47 かおり ものすごい被害被ってんじゃないですか
 48 やよい もう [用意.. ()
 49 [[背中にリュックを背負うように揺すり上げる仕草をする]]
 50 ゆき [でもいちおーさー(.)
 51 [[左腕を突き出し手のひらを拡げてストップの形を作る]] →図 6
 52 よかったよねえ
 53 やよい (..) ま〜ね〜↑ (..) [前の日 ()
 54 ゆき [前日だったら
 55 かおり [いちんち前だったら

まず、やよいの「その日に（日本に）帰る予定だった（42行目）」という言い始めに対し、インタビュアーであるかおりが「ものすごい被害被ってんじゃないですか（47行目）」と、当日に日本に帰る予定だったのならばそれがダメになったかなにかで被害を被っているに違いないという予測の元にやよいを被害者として見なす判断を行っている。それに対して、やよいは笑いで視線を合わせ顔しながら「被害」のストーリーを語ろうとする（48行目）。この時、やよいはリュックを背負い揺すり上げるような動作を3回繰り返して、帰国準備をしていたことを示すジェスチャーを始め、言語外でも明確にその語り出しを示している。しかし、それに対し、ゆきがやよいの語りを遮る形で「でもいちおーさー、よかったよねえ（50-52行目）」と、被害とは逆の「よかった」という価値付与を行う。また、この場面でゆきは、片手をやよいの方に伸ばして手のひらを拡げ「ストップ」の形にして留めるジェスチャーを行い、語りを遮っている（図6）。それに対して、やよいは行いかけたジェスチャーもそのままに、一瞬の沈黙後、「(..) ま〜ね〜↑（53行目）」と同意とも不同意ともつかない反応を示し、帰国準備をしていた語りを止めてしまう。その代わりに出てきた語りは「仮説のシナリオ（hypothetical scenario）」（Georgakopoulou 2001）、つまり、「もし〇〇だったら」という語りである（53, 54, 55行目）。同時発話のように3人が異口同音に、ゆきの「よかった」という価値付与を肯定するためのスモール・ストーリーを始めようとし、その後3人が持っている知識をつなぎ合わせて、やよいの帰国がもし前日や翌日だったら被害に遭っていたらから、被害に遭わ



図 6) やよいの被害体験語り出しのジェスチャー
とそれを止めるゆきのジェスチャー



図 7) やよいが「セーフ」をことばにせずジェスチャーで示したところ

なくて「よかった」という価値付与を促す。例えば、インタビュアーは「丁度（飛行機から）降りたところに地震だったかも（かおり）」「（飛行機が）飛んでるところだったら関空とか中部とかに降ろされて帰れなかったかも（かおり）」と、そのシナリオを補強し、話の中でのやよいがいかに大変な目にあったかを強調する。そこで、最終的にはやよいは「だから良かったんだよー（やよい）」「ぎりぎり（やよい）（図 7）」と言いながら両手をあたかも野球の審判が「セーフ」を示す時のように左右に拡げて、現実世界では自分は「よかった（セーフだった）」のだという認識を示し、3人ともが最初のゆきの「よかった」という発言に同意を示す。

このやよいの話にみられる一連の流れは、正に「語り手と聞き手の相互行為」という名の交渉によって新たなポジショニングを生み出していく過程（Bamberg 2004）を示している。ポジショニングのレベル1、つまり物語世界において、まずやよいは「日本に帰ろうと思ったのに帰れず大変だった自分」について語り始めていた。そしてそれは、インタビュアーからも「被害者の語り」として支持された。次に、レベル2、つまりインタビューの「今-ここ」という場において、いったん3者間に「（準）被災者（インタビュアー）」「（夫が被災者だから完全に関係ないわけではない）間接的被災者（ゆき）」「直接的被害者（やよい）」という関係性が成立する予定だった。被害度順（そのような尺度を用いるとすれば）で表せば、「インタビュアー>やよい>ゆき」となる。しかし、「被害者」としてのやよいの語りはゆきに遮られ、思わぬ方向から「よかった」という価値付与をされたことで、やよいの中では既に過去の出来事で「被害者」としてのラベル付けも終わっていたはずのレベル1の立ち位置は揺らぎ出す。「前日や翌日だったら」という、より悪い仮説のシナリオが、ゆきやインタビュアー、やよい自身からも次々と繰り出され、そのシナリオの中のやよいは大変な被災者になってしまう。そのシナリオに比べれば、現実の自分は「被害を回避したラッキーだった自分」となり、やよいは最終的に過去の出来事の評価付けを改めたのである。そのことによって、先にレベル2で成立する予定だったはずの3者の関係性は、「インタビュアー>ゆき $\geq$ やよい」に転じるのである。

4.2 微妙な話-放射能汚染を気にするか否か—経験者と非経験者（項目 17 から 21 まで）

放射能汚染の話はインタビュー項目ではなかったが、日本に一時帰国するかどうかという話の流れの中でそれは自然発生的に登場する。広島と福井が実家であったゆきとやよいは、「福井だから大丈夫かなと思って（やよい）」と言い、ゆきも「それはあるよねー」と対応するが、その根拠は、日本の実家に残る家族の「別に普通（ゆき）」「ぜんぜん大丈夫（やよい）」という証言であった。そして、日本と英国の間での認識のギャップ¹⁴⁾の話から、日本国内の認識のギャップの話になり、ゆきは、（たまたま知り合いがいる）東京と実家がある広島のギャップについて語り始める（表 1, 項目 18）（ここまで、「何の」認識であるかはまだ明らかにされていない）。そこで、やよいが「食品とかね」と一言口を差し挟んだことで、その「ギャップ」とは放射能汚染に対する認識の差についてであると判明し、ゆきはそのストーリーに沿った話を始める。ゆきの東京にいる友人は、「広島では考えられないくらい」食生活に気を遣っており、野菜の選び方から洗い方、牛乳を子どもに飲ませないなど、「夫が英国人でこっち（英国）の情報も入るから余計に、ね。（ゆき）」と言うように、ゆきはこの友人の行動はやや極端な例として捉えていることが分かる。しかし、その話を聞きながら聞いていただだけのインタビュアーに対し、ゆきは、一通り話し終わった後に、インタビュアーを指し、「やっ（.）てい…（.）ます？↑」と質問する。そこでインタビュアーは「やりたいけど、そこまでやったら生きていけない」と、初めて放射能汚染に対する自分の態度の一端を明らかにし、実は食品放射能測定器を購入していること、水はミネラルウォーターを使用していることを話す。

この時、ゆきは、例 3) が示すように「あたしがもし東京ーにいたらかおりさんほど気をつけてないかも」と首をひねりながら言う。

例 3) ゆきによる間接的不同意の表明（仮説のシナリオ）

- 56 ゆき あたしがもし東京ー(.)にいたら…
 57 [[肘をつき、首を何度もひねりながら]]
 58 かおりさんほど気をつけてないかも
 59 わかんないなーどうだろー
 60 [[顔を上げてやよいを見る]]
 61 やよい んー(.) [どうかー
 62 [[少し首をひねって考えている]]
 63 ゆき [気をつけられないかなーわかんないー
 64 かおり けっ(.) こうなんかー、あの

14) ここでは、やよいの義母(英国人)が「日本には今は行かない方がいい」とアドバイスしたことを受けて、英国人にとって日本は一塊だから全体が放射能に汚染されているように思ってしまうのかも知れないという話をしている。

65 「出荷停止になりました」とかそういうニュースを（ ）

ゆきは「わかんないなーどうだろー（59行目）」と前言に含みを持たせる発言をした時、やよいに目線を送る。そしてやよいはそれを受けて「んー」と首をひねってうつむき考え込んでしまい、「そこまで気をつけるかどうか」を明確にしない。しかし、その後すぐに、インタビュアーは「出荷停止になった話（65行目）」「水道水から放射性物質が出たけれど発表が遅かった話」「神経質になって何を子どもに食べさせたらいいのか分からなくなったが、食品の測定器があるので、どこの産地のものであっても測定さえすれば客観的な数値が分かるので安心出来る」などの、自分が「気をつけている」ことへの正当性を補完するスモール・ストーリーを展開する。

ここでのやり取りでは、ゆきが友人の話をした後のやり取りにポジショニングの交渉が強く現れる。ゆきの「私がもし東京にいたら」という仮説のシナリオは、Georgakopoulou (2001)の間接的な不同意(indirect disagreement)に類するものといえる。このシナリオの中のゆきは、ポジショニングレベル1としては、東京にいつつ特に放射能汚染にそこまで気をつけていない自分であり、インタビューの場においては(レベル2)、インタビュアーと考えの差を提示するものである。それゆえ、沈黙や、「かも」「分かんないなー、でも」などの緩衝となる語用論的表現を付加し、不同意を間接的に表明している。インタビュアーはそれに気が付き、自分は気にし過ぎているわけではないことを証明するために、その場(東京)にいた経験者として知り得る情報で、それを知ったら当然そうなる、という語り口で、出荷停止や水道水汚染の話をし、しかし理不尽に風評被害を広めているわけではなく「測定したらどこの産地のものでも食べる」と述べてゆきを説得にかかる。当初態度を決めていなかったやよいも、「産地チェック」は福井の子もやっていると援護し、ゆきは頷き、「そっかー」「あーそーなんだー」など同意を表し始め、「確かに(産地を)みるかもね、東京にいたら」と再び仮説のシナリオを話し出して意見を改め、最後には「農家を補償しなければならない」という合意でこのやり取りは終了する。ここでなぜ「農家を補償すべき」と結論づけてこの話題を終了したのかは、「5. 社会的自己の表出と過程」で述べる。

4.3 義援金はどこへーそしてみんな「被害」¹⁵⁾者になった(項目22から24まで)

前述の放射能汚染の話の最後で、農家を支援しなければならないということになり、その流れでやよいが「だって義援金すごいあつまった()あれもまだ分配されてないってね」と話し出す。そこでひと呼吸おいてから、インタビュアーが「思いあまって義援金とか出してしまったんですけど、あれ？私の義援金はどこへいつってしまったの？(語尾聞き取れず)」と義援金に関してはある意味「被害」者であることを申し立てる。するとそれにオーバーラップし

15) ここにおける「被害」とは「被災」とは異なり、東日本大震災の直接的な被害に遭ったことを指すものではなく、この場で共通認識の構築に必要な、より微細な被害を含む。

て「そんなこと言ったら私たちだって（.）ねえ」とゆきがやよいを見ながら言う。それに対してやよいも「ねー」と答え、ゆきは続けて「チャリティーとかこっちでも何度かやったり」と言い始める。その後インタビュアーが「チャリティーはどんなことを（語尾濁す）」と聞くと、ゆきは長い沈黙の後「あの（..）なんだろうなー」とやよいの顔を見て、チャリティーの内容を思い出そうとする。そこからゆきとやよいのチャリティー話の協働構築が始まる。

義援金の話で、ポジショニングのレベル1として物語世界の中で立ち現れる自分は3人とも、「何か出来ることがないかと行動した自己」であり、さらにそれはいずれ行方不明になる義援金を支出した「被害」者としての自己である。レベル2では、まず「被害」者としての自己を演出したインタビュアーに間髪入れずに同じ立場であることを表明したゆき、その流れに乗ったやよいは、インタビューの場において、いずれも「何かしたいと思う純粋な心を裏切られた被害者」として強く共感を抱き、交渉すべき事項もなく、さほど長引かずにこの話題は終了する。

5. 社会的自己の表出と過程

以上の3つの話について、順を追って詳細に分析していくと、1つ1つの話題について、それぞれのポジションを確認し合って落ち着いてから話題を終了していることが分かる。まず、1つ目の震災体験談ではお互いの震災に対する距離感（被害の度合い）を明確にし、話題を終了している。ここでは、3人の関係性を「被災度」で調整して整理し（レベル2）、（東日本大震災という出来事にかかわることで立ち現れた）日本人としてのアイデンティティ（レベル3）を明確にしている。2つ目の放射能汚染の話では、合意出来る落としどころが「農家支援」という、一見見当違いな方向に収まったようにみえるが、「今-ここ」の場において、全員が同じ距離感で感じることができる（農家出身者はいない）ところに落ち着き、レベル1である物語世界の中では、3人は「経験者」と「非経験者」に別れても、レベル2の段階においては円滑な「合意」で話題を終了している。そして3つめの義援金に関しては、レベル1である物語世界の中では全員「被害者」というポジションにおり、それを今-この場において確認し合って終了する。そこでみえてくるのは、異なる意見や不同意の本質はそのままであっても、同意出来る部分を探し、予定調和的にそれぞれの立ち位置を確認してから次に進む、そして最後には上手く落としどころを見つけて終了、という「今-ここ」の場を流れさせるコミュニケーションの戦略である。この一連の1時間ほどの過程の中で、ここにいたって、最初にインタビュアーが設定していた、「国の内外」という超え難くみえた地理的境界線は薄くなり、インタビューは終盤に向けて3人が同じ距離感でものごとを言える方向（農家支援、義援金、日本政府の対応、反原発、母としての心など）へ進んでいき、最終的にはポジショニングのレベル3である「transportable」な自己として、「同じ日本人」としてのアイデンティティを共有することとなった。

ではなぜ、調査者が最初に設定した地理的境界線が心理的境界線に繋がらなかったのか。これは、ゆきの夫が実際に震災を体験していたという事実の他にも、このインタビュー時期に行われたこれら在英邦人と同じコミュニティに在住する英国人女性へのインタビューに、その原因の一端を垣間みることが出来る。彼女たちは、その当時、日本人とみれば「大丈夫だった？」と問いかけ、1人はインタビューの謝礼を一旦受け取った後に、これを被災者に寄付して欲しいとインタビュアーに手渡してくれたほど同情的であり、悲劇を悼む意識を共有しようとしていた。すなわち、在英邦人であるインタビューーたちは地震が起こった当時、自分自身が被災しているかどうかにかかわらず、「被災国日本に所属する日本人」としてお見舞いの言を受け、また日本人として「なんかできることないかなって（やよい）」行動し、またそれを日本人同士で相互に、あるいは社会的に期待されていたのである。このことは、少なからず、自分が日本人であることを彼女らに再認識させただろうし、彼女らの日本人としてのアイデンティティを強化したかも知れない。そこへ、「海外在住の方は別の気持ちを持っているだろう」という仮説を立ててインタビューに臨んだ調査者は、その二項対立的な地理的境界線を崩されることとなったのではないだろうか。

6. まとめ

本研究では、英国在住の日本人に震災体験を聞き、そこに現れるコミュニケーション手段やアイデンティティの表出を分析した。本稿では1組のペア・インタビューで語られたナラティブを詳細に分析し、その過程を追うことで、人は語る時、言語的・非言語的手段を駆使して聞き手を語りに巻き込み、あるいは遮り、協働してまとめ上げる様子が観察された。異なる意見があっても直接的に議論をせずにさまざまな言い回しや語用論的技法、身体言語を使用しながら最後には何となく合意に持っていく手法がどこまで一般化され得るかは、今後更に分析を進めていかなければならない。

冒頭で述べたように、東日本大震災を直接的に経験していない在外邦人の「体験談」については、まだ研究が進んでいない。今後の解明すべき疑問として、例えば、阪神淡路大震災を海外で見聞した日本人が罪悪感を感じたと述べるような現象は、今回も起こっているのだろうか。あの時よりも遥かにメディアも発達し、震災当日からはずっとNHKのUstreamを観ていたという彼女たちは、日本にいた私たちと情報源にそれほど差がない。むしろ海外の方が原発報道は正確だったとも言われるこの時代、単に地理的な遠近や、直接的か間接的かで「心の被害」の度合いを計るのは間違いであるかも知れない。被災地の被害の大きさに潰れてしまいそうな小さな彼女たちの声を拾い、今後も今という時代における「震災体験」を分析していきたい。

トランスクリプト記号

[	オーバーラップ開始部
(.)	マイクロポーズ
(..)	0.5 秒以上のポーズ
=	続いて聞こえるように発話された箇所
↑	上昇イントネーション
…	言いよどみ
@	笑い
ー	長音
()	著者による補完
() 内空白	聞き取り不可能な語
[[]]	ジェスチャー。その上の行の発語とジェスチャーの始点を合わせている
(())	ジェスチャー以外の身体動作
下線	著者による分析上の強調

参考文献

- Bamberg, Michael (1997). Positioning between structure and performance. In Michael Bamberg (ed.). *Oral versions of personal experience : three decades of narrative analysis, Journal of Narrative and Life History*, 7, 335 - 42.
- Bamberg, Michael (2004) Talk, small stories, and adolescent identities. *Human Development*, 47, 331 - 53 .
- Bamberg, Michael (2013). Narrative Practices and their analysis. Plenary Speech at 13th conference of International Pragmatics Association. India.
- Bamberg, Michael and Alexandra Georgakopoulou (2008). Small Stories as a New Perspective in Narrative and Identity Analysis. *Text and Talk*, 28(3), 377 - 396.
- Briggs, Charles (1986). *Learning how to ask: A sociolinguistic approach of the role of the interviewer in social science research*. Cambridge: Cambridge University Press.
- De Fina, Anna (2003). *Identity in narrative: A study of immigrant discourse*. Amsterdam: John Benjamins.
- De Fina, Anna, Deborah Schiffirin and Michael Bamberg (eds.). (2006) *Discourse and Identity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- De Fina, Anna and Alexandra Georgakopoulou (2012). *Analyzing Narrative: Discourse and Sociolinguistic Perspectives*. London: Cambridge University Press.

- Georgakopoulou, Alexandra (2001). Arguing about the future: On indirect disagreements in conversations. *Journal of Pragmatics*. 33, 1881- 1900.
- Georgakopoulou, Alexandra (2011). Narrative Analysis. In Ruth Wodak, Barbara Johnstone and Paul Kerswill (eds.) *The SAGE Handbook of Sociolinguistics*. pp. 386 - 41. London: SAGE.
- Goodwin, Charles (1981). *Conversational organization*. New York: Academic Press.
- Gorden, Raymond L. (1987). *Interviewing: Strategy, techniques, and tactics*. Homewood. IL: Dorsey.
- 秦かおり (2013) .「何となく合意」の舞台裏：在英日本人女性のインタビュー・ナラティブにみる規範意識の表出と交渉のストラテジー」佐藤彰・秦かおり編『ナラティブ研究の最前線：人は語ることで何をなすのか』 pp. 247 - 72. ひつじ書房 .
- Heath, Christian (1986). *Body movement and speech in medical interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Holstein, J. A. and Gubrium, J. F. (1995). *The Active Interview*. London: Sage Publications, 山田富秋他訳 (2004) .『アクティヴ・インタビュー：相互行為としての社会調査』せりか書房 .
- 細馬宏通 (2008) .「発話とジェスチャーはいかに話題の視点を表現するか？ー日本語における左右概念を巡る個人内・個人間相互作用」篠原和子・片岡邦好編『ことば・空間・身体』 pp. 37 - 68. ひつじ書房 .
- 井出里咲子 (2005) .「スモールトークとあいさつー会話の潤滑油を超えて」井出祥子・平賀正子編『講座社会言語科学第1巻 異文化とコミュニケーション』 pp. 198 - 214 . ひつじ書房 .
- 井出里咲子 (2013) .「ナラティブにおける聞き手の役割とパフォーマンス性ー震災体験の語りの分析よりー」佐藤彰・秦かおり編『ナラティブ研究の最前線：人は語ることで何をなすのか』 pp. 43 - 64. ひつじ書房 .
- 片岡邦好 (2011) .「間主観性とマルチモダリティ：直示表現とジェスチャーによる仮想空間の談話的共有について」『社会言語科学』14 (1) , 61 - 81.
- 片岡邦好 (2013) .「行為と知覚のナラティブーテレビ CM のマルチモーダル分析からー」佐藤彰・秦かおり編『ナラティブ研究の最前線：人は語ることで何をなすのか』 pp. 273 - 93. ひつじ書房 .
- Labov, William and Joshua Waletzky (1967). Narrative analysis. In J. Helm (ed.), *Essays on the Verbal and Visual Arts*, 12 - 44. Seattle, WA: University of Washington Press.
- McNeil, David (1992). *Hand and mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- McNeil, David (2005). *Gesture and thought*. Chicago: University of Chicago Press.
- 桜井厚 (2002) .『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房 .

- Schiffrin, Deborah (1990). The management of a co-operative self during argument: the role of opinions and stories. In A. D. Grimshaw, (ed.) *Conflict talk: sociolinguistic investigations of arguments in conversations*. pp. 241 - 59. Cambridge: Cambridge University Press.
- Scollon, Ron and Suzie W. Scollon (2004). *Nexus Analysis: Discourse and the emerging internet*. London: Routledge.
- 山田富秋 (2011) . 『フィールドワークのアポリア : エスノメソドロジーとライフストーリー』せりか書房 .
- Zimmeman, Don H. (1998). Identity, contest and interation. In C. Anaki and S. Widdicombe (eds.) *Identities in talk*. pp. 87 - 106. London: Sage.